

## 「日田水電会社石井発電所の生活」についての聞き書き

東定, 宣昌  
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/13558>

---

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 2, pp.18-21, 1973-12-10. エネルギー史研究会  
バージョン：  
権利関係：

# 「日田水電会社石井発電所の生活」についての聞き書き

東 定 宣 昌

これは明治期の電気産業の資料渉猟の中で二度にわたってお会いする機会を得た大分県日田市在住の江藤秀次さんの水力発電所（日田水電石井発電所）勤務時代のお話である。

江藤さんは明治二十五年八月四日、大分県日田郡五和村大字石井（現在日田市石井町）に生れ、十二才で石井尋常小学校を卒業すると直ちに日田水電会社に「すべりこみ」、石井発電所に勤務された。その後、二十二才のとき、「徴兵検査に合格はしましたけれども、幸か不幸か抽籤で逃れた」のを契機に日田水電会社を退社して上京、「虎岩」<sup>1</sup>に勤務の傍、工手学校<sup>2</sup>に入學、大正六年卒業された。第五十五期卒業生である。工手学校卒業後は安川電機会社に捲線工として入社、昭和二十年敗戦とともに工作課長を最後として退社された。

現在は、戦後同氏が設立された大日水道設備会社の会長である。日田水電会社に関しては別の機会に何らかのかたちで詳細に紹介したいと思うが、同社は明治三十三年六月三日創立総会を開催し、翌三十四年十二月二十五日送電を開始した。<sup>4</sup>開業時の資本金は六万円、点灯数は隈、豆田両町で八百四灯であった。<sup>5</sup>同社は大正四年五月末日に九州水力電気会社に譲渡され消滅している。<sup>6</sup>

日田水電会社が設立された時は、既にわが国の電気産業は一万一千ボルト送電の近距離送電時代に入っていたが、地方では電気がなお珍しい時代であった。日田水電石井発電所でも「機械が廻っているのも珍しいし、電灯というのがつくというのも珍しいで、町の者だけでなく、田舎の方から見物人がおしかけ、稲荷鮎を作つて売る

店や、一杯やる所、駄菓子を売る所など三、四軒の茶店が発電所のまわりでできた」くらいである。また発電所は多くの電灯をつけており、「夜なんかは村の若い衆が毎晩のように三人、五人と遊びに来」ており、洪水の時など「声をかけなくても村の人が発電所がつかるといつて駆けつけてくれて手伝つてくれて」いる。毎月一日、十五日の水路の漏水修理日は「魚をとるのが楽しみで、村の好きな人は皆知つていて、水をとめたらすぐ魚をおつかい廻して」いた。この石井発電所は現在なお九州電力石井発電所として五百キロワット二基の発電機が稼働中であり、取水堰と水路が若干嵩上げされた程度で日田水電会社時代そのままの姿をとどめている。

1.

明治三十二年六月水力発電所適地として三井芝浦製作所技師岸敬二郎によつて選定された五和村大字石井津辻界の地は江藤さんの生家からわずかに二、三百メートルのところであつた。翌三十三年四月頃から始まつた発電所工事は「毎日ですごすのに、川つぶちを走つたり、川で魚をとつたり、本に登つたりするくらい」であつた子供にとつて非常に面白く、工事現場は恰好の遊び場だつたようである。「土建屋が工事をやる、機械が舟で運ばれて来る、そんなのが面白い、それで毎日行つて遊び場でした。」「まもなく六十キロの発電所が出来上つて、その頃ですから水車といつてもハンドオペレーションですわね。毎日行つていたずらしておるわけです。そうしているうちに小学校も卒りましたので、発電所の主任さんが、今

日からでもよいからずつと来いということですべり込んだわけです」  
こうした入社の方は江藤さんのような子供に限るものではなかつたようである。発電所は「発電所の番人」四人と「主任さん」一人であつたが、「発電所の番人は別に熟練工でも何でもなくて、土地の若い衆が人夫で来ておつて、すべりこんだ組」だつた。また電工は「電工長一人と他に四、五人おりましたが、電工長は地方で熟練してきた人で、後の人は電工とは称しておるけれども、土地の若い人の気が利いた人が、人夫に来ておつてすべり込んだ」のである。江藤さんが入社した頃と思われる明治三十五年の日田水電会社の雇用者は次の通りであつた。

「事務員 参名

技士長 参名 技士 参名 運転手 参名 技生 式名 雇 八名<sup>9)</sup>

江藤さんが技生であつたのか、雇であつたのか明らかでないが、少なくとも技生や雇の入社の仕方は前述のようなものであつたと思われる。

## 2.

前述のように、発電所勤務は「主任」一人、「番人」四人で、技士長は本社（日田郡隈町百番地）にあつた。番人は二人ずつ二交代で、交代時間は「その頃は少年福祉法も労働基準法もない時分ですから、お昼十二時から夜の十二時に交代するというふう」であつた。しかし、暫らくして「慣れて横着になつて」から、「一日すれば一日休む」二十四時間勤務になつてゐる。江藤さんによると「田舎のことですから、百姓している家の人が多いわけで、十二時間勤務では農繁期など家の手助けが出来ないし、夜の十二時では帰る人も出る人も辛いわけです。二十四時間にして、なおかつ忙しい時には人

にかわつてもらつと一寸した仕事が出来るとはいいね」という。これは皆が話し合つて決め、「主任さん何もおつしやらない」ため久留米送電が始まる（明治四十年）迄続いている。

主任は「自由勤務」で発電所の側の社宅に居住していた。電工は「朝出勤して昼間働いて夜は交代で宿直というのがあるわけで」電工の方が融通がつかなかつた。

非番の時の江藤さんは次のようであつた。「田んぼを少し作つておりましたから家の手伝いをしたり、農家のちよこちよこした手伝いですね。しかし年が若いものだから、用事があれば当番のものが昼から帰るやつを帰らさずにこき使ひうけたいね。」

## 3.

発電所では古着屋でさがしてきたり、自分で勝手にしつらえた、「ベトナムの難民服」のようなものを着て、下駄や草履を履いていた。お米や沢庵などを持つて行き、七輪で火を起こし、豆腐を買つたり川魚を取つて自炊した。発電所での主な仕事は次のようなものである。

「機械が廻つてゐるうちは用事がないんです。強いていえば、三十分おきの日誌つけです。その頃はレコーディング・メーターなど使つていないので、電圧計と電流計を読んで日誌をつけていました。暇の時にその日の時間、時間の電力を計算して日誌の横に書き込んでいました。」

「夜は十時頃からだんだん消灯しますので電圧が上がってくるわけです。電圧が上がってくるからそれを下げる。十二時頃になると八十ポルトぐらいに下げたおいて、表向きは起きていなければいけないが、みんな寝てしまふわけです。ところが緊張していますから何か事故があつたり、ロードが変わると発電機のウナリでわかるわ

けです。六十キロ（出力六十キロワットの発電機）の時はハンド・オペレーションでしたから、傍に講談本を置いて、講談本をみながらウナリで水量を調節しておりました。」

これが主な仕事で、他には発電機がアマチュアタイプの時には、コリクタリングの接触面の荒れをきれいな木綿でふきとつてやつたり、励磁機のコミュテーターの表面のカーボン汚れを軽くふきとつてやること、時々「ダイナモ油」（発電機用）、「マシーン油」（水車用）を補給してやること等があつたが、「そういうことは勤務してあるうちには仕事のうちに入らんこと」だつたようである。

また時には水車のシャフトの側のグランドパッケンジャーのパッキンを作つた。パッキンはコットンを編んでヘッドで煮て作るが、これには技術が必要だつた。「発電所に勤めておりながら半分魚とりをしておりました」という江藤さんの楽しみは、レギュレーターをいじつてみたり、電話器を分解して、叱られないようにこつそり組み立てておいたりすることだつたが、それでも「せめて夜だけは満足に寝られる仕事の方がいいなと思つたことはありません」ということである。

#### 4.

入社時の江藤さんの賃金は日給五銭であつた。「その頃は大人の人もみんな日給で、三十銭、三十五銭で、四十銭も貰う人は上等の方でした。」江藤さんも「半期か一年か覚えませんが、二銭か三銭か上がつていき、工手学校に行く頃（二十二才、退社時）には、三十銭でした。しかし、その頃はお米が一升十銭、ウドン一杯二銭です。他に賞与もごくわずかですがありました。お盆と年末に二回いただくわけです。どういふ算定しておつたのか知りませんが、それでも一月分ぐらいあつたでしょう。」

給料は月末に発電所の人たちの分を全部まとめて本社に貰いに行

き、それには江藤さんたちが「使いをやらされよつた」わけで、それがあらためて、発電所の主任から各人に渡されていた。しかし、日給であつたのは前述の雇ないし技生くらいまでであつたと思われ。事務員がどうであつたかは不明である。久留米送電（明治四十年）以前の発電所の主任は、「工手学校を出た、久留米の井上曆次という人で、月給二十七円」である。久留米送電の増設工事のため来日した今井三郎の「月給は六十円で、郡長さんと同じで、まるで神様のようでした」といわれる。

江藤さんは当時子供であつたせいも、貰つた日給は「親に皆やつてしまひよつた」のである。

明治期の地方の水力発電所の生活はきわめて平凡で牧歌的であつたようである。またそうした「発電所の番人」「機械の油さし」の毎日現在の水力発電所のそれともそれほど大きな差異はないのかもしれない。事故らしい事故といえ、たつた一度洪水による堰堤崩壊のため一ヶ月停電を余儀なくされたくらいであるという。しかし、こうした牧歌的な生活の中で、一方では「寄るとさわると工手学校ぐらい出なけやいけん」というようなことがいわれている。屢々訪れた岸敬二郎<sup>13</sup>は、折にふれ「東京に出て来い」と語りかけ、今井三郎は北海道苦小牧の千歳川発電所工事のための離日に際し、『荒川電気工学』『藤田電灯学』、神田仙吉の『ポケットブック』を呈し、激励している。かくして江藤さんは前述したように徴兵検査の抽籤洩れを契機に上京し、工手学校に学ぶのである。

以上のような水力発電所労働者の生活は、わが国の近代化過程における石炭産業の地底労働者の苛酷な労働や、紡績業の女工哀史と対比する時きわめて平凡でめぐまれたものであつたかもしれない。

しかし電気産業に従事する労働者の生活もまた歴史の一コマであり、当時の火力発電所労働者の生活と比較するとまた異なつた興味深い問題が出てくるかもしれない。

(1) 合資会社虎岩商会

開業年月日 明治三十七年十一月

主要製作品 電気諸機械、鉄工諸機械、海軍省用品、通信省

用品、鉄道省用品

工場 東京市京橋区舟松町一

代表者 虎岩清四郎

(『電気事業五十年史』八八一頁)

(2) 工手学校は「各専門技師の補助タルヘキ工手ヲ養成スル」ため、工学会の後援の下に明治二十一年二月に開校した。開校

時は土木、機械、電工、造家、造船、採鉱、冶金、製造舎密の八学科があつた。(『二十五年記念 工手学校一覧』参照)

(3) 日田水電株式会社「創立総会議事録」一頁。

(4) 日田水電株式会社「第四期明治三十四年下半年営業報告書」

三頁。

(5) 同右 七頁。

(6) 九州水力電気株式会社「第九回報告書」 十四頁。

(7) 日田水電株式会社「創立総会議事録」 二頁。

(8) 同右 四頁。

(9) 日田水電株式会社「第五期明治三十五年自一月至六月営業報告書」 十一頁。

(10) 明治四十年、日田水電会社は三百三十キロワット発電機を増設して久留米電灯会社へ卸売を開始している。

(11) 電工は法被に股引を着け、法被には日田水電会社の標が入つ

いたが、遠目には通信工夫と見分けがつかなかつた。法被だけは会社の支給だつたと思われる。

(12) 明治三十三年七月東京帝国大学電気工学科卒業後、山形県鶴

岡水力電気株式会社技師長、後に九州水力電気株式会社技師長、さらに取締役となる(『電気事業五十年史』一〇三頁。)

(13) 明治二十八年七月東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業し

芝浦製作所電気部技師に就職、明治四十四年芝浦製作所常務取締役となる(『工学博士 岸敬二郎伝』参照)。